

## 第6回 越後平野の水の思想 ～越後平野を守る大河津分水～

日時 平成18年3月9日(木) 18:00～20:00

会場 燕総合文化センター・中ホール

ゲスト: 五百川 清氏(信濃川大河津資料館長)

ホスト: 阿達 秀昭氏(新潟日報社編集委員)

(司会): お待たせいたしました。ただ今より、「我ら信濃川を愛する～信濃川自由大学」を開校いたします。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。私、本日の司会・進行を務めさせていただきます「燕三条FM放送局ラジオは～と」パーソナリティの桑原和希と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

信濃川自由大学は、信濃川の自然や歴史など、その魅力を広く地域の方々に知っていただくために開校しました。今回の燕会場で第6回目の開催となりますが、毎回信濃川にゆかりのあるゲストの方々から様々なお話をお聞きしております。今後は十日町・見附での開催が予定されておりますので、是非、ご参加いただきたいと思います。

なお、過去5回の講座に関しましては、信濃川自由大学のウェブページで議事録を公開しております。お手元の資料にアドレスが記載しておりますので、そちらからご覧くださいませ。

それでは、はじめに主催者を代表いたしまして、信濃川河川事務所所長・宮川勇二よりご挨拶申し上げます。

(宮川): 皆さん、こんばんは。年度末のお忙しい中、来ていただきありがとうございます。信濃川自由大学ということで新潟日報さんと国土交通省の信濃川下流河川事務所、それから当事務所ということで開催させていただきまして、昨年10月から第1回、月に1回ずつという形で第6回目を迎えたという状況でございます。毎回たくさんの方に来ていただきまして、大変うれしいと思っておりますし、また今日は五百川先生が大河津資料館の館長ということで、今日は治水というテーマで越後平野の水の思想という形で、また楽しい話を今日も聞かせていただけると期待しているところでございます。

先ほど紹介がありましたように、あと2回、4月の十日町、5月は見附と形で流域をそれぞれ回りながらシリーズといたらおかしいですけども、開催させていただいておりますので、また今後とも是非、お時間のある限りご来場いただければと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

(司会): ありがとうございます。続きまして、本日の開催地である燕市教育委員会教育長・登石弘淑様よりご挨拶をちょうだいいたします。

(登石): 皆さん、こんばんは。本来ならば、開催地の市長が挨拶を申し上げますけれども、何しろ合併の最終段階の協議に入っておりますので、私、教育長の登石と申しますが、代わってご挨拶を申し上げたいと思います。

信濃川自由大学というすばらしい企画を当燕市に講座を開設いただきましたこと、まずもっと感謝を申し上げます。大変ありがとうございました。本日のゲストの五百川先生は、実は私の大

先輩でいらっしゃいまして、大学も同じく、教室も同じということでございまして、先生のお話は何度かお聞きいたしました。お聞きするたびに、新しい疑問が生まれるのです。そして、実地調査をしてみたくなったり、疑問解決のためにいろいろ調査をするなり、とにかく深みのあるおもしろいお話が聞けるのではないかと感じております。本日のテーマの「越後平野の水の思想」につきましては、私は全く初めてお聞きする内容かと思えますけれども、私はとても楽しみにしてまいりました。

せっかくの機会でございますので、燕市のちょっとした紹介といたしますか、触れさせていただこうかと思っておりますが、燕における金属製品産業は皆さんもご承知だと思いますけれども、江戸の初期から和釘に始まったとされているわけでございますが、その後、銅器、やすりなどが登場しますけれども、明治になると洋釘が輸入され、梓釘は衰退していくという一途を辿っているわけでございます。大正に入りますと、燕の産業市場最も華やかな洋食器の製造が始まって、今日の金属加工基地の町へと発展するわけでございます。

一方、水との闘いに明け暮れた蒲原の農民は、大河津分水の完成で日本一の穀倉地帯を作りあげるわけですが、この間、一帯は信濃川など大きな河川が貫流するために水田化は非常に好調なのでございますけれども、今日もお話があると思えますけれども、低湿であったために、たびたび洪水に襲われているわけでございます。記録にあるだけでも、江戸時代だけで百数十回も洪水があったときかさされております。とにかくそういった経過を辿って今日に及んでいるわけですから、信濃川自由大学の学習を通してより一層信濃川について理解を深めていただいたり、信濃川について愛着を持っていただくきっかけになればと思っています。

重ねて、講座を開設していただいたことに感謝を申し上げ、市長に代わってお礼の挨拶とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございます。よろしく申し上げます。

(司 会)：どうもありがとうございました。

それでは、第6回講座に移らせていただきます。今回の講座のテーマは、「越後平野の水の思想～越後平野を守る大河津分水」です。本日は、ゲストスピーカーに信濃川大河津資料館館長の五百川清先生をお迎えしています。ホストは、新潟日報社の阿達秀昭編集委員が務めます。

まず、お二人のプロフィールをご紹介します。

五百川先生は、1933年、上越市、旧直江津のご出身で、1956年に新潟大学教育学部をご卒業後、公・立国立中学校、新潟県立教育センターに勤務されました。1993年、新潟市立木戸中学校校長を最後に定年退職された後、新潟県立歴史博物館、信濃川大河津資料館の展示設計に従事され、2001年からは信濃川大河津資料館館長に就任し、翌年の2002年には新潟大学人文学部講師(地域入門担当)をつとめ、そのほか各地で講演活動や講師を務めるなど、多方面で活躍されています。五百川清先生の著書は「大河津分水双書」第1巻から5巻、今後は10巻まで刊行予定です。共著に「後世への遺産」「新潟県の100年と民衆」「信濃川下流紀行」「新潟県風土記」「図説・新潟県の歴史」などがございます。なお、今月20日に燕市と合併する分水町の町史・近現代部会長も務めています。

続いて、阿達秀昭編集委員をご紹介します。阿達編集委員は1953年、三条市のご出身で、



1976年新潟日報社に入社後、報道部デスク、編集本部デスクなどを経て、2004年、学芸部長代理兼編集委員を務め、2005年4月より学芸部長兼編集委員としてご活躍されています。

それでは、五百川先生、阿達編集委員をお迎えいたします。皆様、どうぞ大きな拍手でお迎えください。ここからの進行は、阿達編集委員にお願いいたします。どうぞよろしくをお願いいたします。

(阿 達) : ただ今、ご紹介いただきました新潟日報の学芸部長兼編集委員をやっています阿達と申します。今ほど紹介がありましたけれども、お隣の三条で生まれました。燕も親戚関係が結構あるのですが、こういった形でおじゃまするのは初めてでございます。今日は今ほどのテーマ、説明があったとおり「越後平野の水の思想～越後平野を守る大河津分水」ということで、五百川先生からお話をお聞きしたいと思っております。

実際、新潟県は越後平野というくらいですから、瑞穂国と言われていました。豊かな水量を誇る信濃川は、母なる川と定説で言われています。時に狂乱の母に化ける信濃川をいわゆるやさしい母に変えたということと言えるのは、大河津分水ということでしょう。一方で、水の国という言われ方もしています。昔から洪水に見舞われたり、川や湖、潟や沼が多いことから、いわゆる大蛇信仰とかカッパ、龍神といった水がらみの伝説や昔話の宝庫でもあります。大河津分水は人間が造った最大のプロジェクトと言われているくらいですが、人工の川が自由奔放の川をある面ではコントロールし得たという形で、歴史がかなり高い評価をしているということで、皆様ご存じのとおりです。暴れている分にはいいのですけれども、人類が川と共存したり川のそばに住み始めると、荒れている川、いわゆる狂乱の母なる川という形では、怖いということで自ずと制限される、その歴史の中で人類と川、これは苦闘の歩みを続けています。

このターニングポイントと言われているのは、今ほど話している大河津分水ができた84年前、そして75年前と言われています。前者の84年前というのは、いわゆる初めて大河津分水が通水したとき、75年前というのは、いったんできたのですけれども、自在堰が陥没したことで改修工事に入ります。それができたのが75年前ということです。特に五百川さんは、地元の方々のお話を聞いている中で地方に伝わる時代の区分を、いわゆる大河津分水ができる前とできてからという区分けに引かれるそうです。そういった意味では、大河津分水の一番の生き字引と言いますか、詳しい五百川さんから今日、治水に対する先人の努力と英知を学ぶ一方で、今後、洪水や災害に対する備えを学んでいただけたら幸いかと思っております。まず最初に、これまでの大河津分水の歴史など、あるいは役割的なものをちょっと短く編集したビデオ、正しく言うと、「民衆のために生きた土木技術者たち」のビデオなのですけれども、それを5分程度でまとめていますので、それを最初にご覧いただいてから、本題に入りたいと思っております。よろしく申し上げます。

(ビデオ上映)

若干もう少し続くのですが、ガイド的なものとしてはこれで止めておきたいと思っております。

今ほど横田切れという絵図がありましたが、私も今日、こちらの会場に来る前、中之口川を久しぶりに通ったのですけれども、雪解けの時期のわりには水が少なかったです。ご存じの方もおられるかもしれませんが、洪水の時期には手で川の水をすくえるくらいまで、堤防ギリギリまで水が押し寄せたこともあると聞いております。特にご当地の大河津分水から蒲原平野に入るところは、昔から人と水の闘いの歴史を繰り返してきました。雪解けの話をししましたが、これは大河津分水のところ立ちますと、かなりゴーゴーという音がしていますが、ここ下流の燕市街地に来ると、極めて穏やかな水の量になりますし、どのくらい大河津分水の負うところが大きいというのが想像できるかと思うのです。取りあえず私が最初に水の国という話を若干しま

したけれども、越後の国が昔から洪水、暴れ川があちこちにあるというか、湖沼等がいっぱいあるわけですが、洪水等に見舞われた歴史というのはどういう形でしょうか、なぜそういうふうな形で新潟県の土地が洪水等に見舞われるケースが多かったのか、その辺からお話をお願いできますか。

(五百川)：今ほどのお話でございますけれども、今日はいつもの私の講演という形と違いまして、名ホスト役の阿達さんの問いかけで対談形式で、くだけてお話ができればと思っております。それで、CDで今のお話について少し触れてみたいと思います。

その前に大河津分水の位置、今日はホストの阿達さんのご助言もありまして、最初に大河津分水は初めてという人もいるだろうということで、今ほどDVD、この間できたばかりの映画でございますが、その初めの部分を見てもらったのですけれども、ここに大河津分水の位置が出ております。とにかく 10 キロ、最も信濃川と日本海に接するところを掘った人工の川だと、その位置をまず見ていただきたいと思います。

そして、さっき見た映像のとおりでございます。日本海側に 100 メートルを超える弥彦山の山なみが立ちはだかっていまして、そこを切り開いて、ご覧の通り人工の川が造られたと。右下の方に流れているのが、小さな形ですけれども、信濃川の本流でございます。

今のお話の、なぜ洪水被害というものが起きてきたのか。洪水というのはご承知のように、随分昔から自然現象としてあるわけですが、この図の物語るところを見ていただきますと、越後と言いましても、いわゆるかつて上越地方の方が中下越の越後平野よりも、はるかに石高、豊かな生産を上げていたわけです。ご承知の上杉謙信もそこで、

そしてご覧のように、江戸時代の半ば過ぎの新田開発以降、黄色い部分を見ていただきたいのですが、蒲原郡・越後平野の石高が急増します。そういう一つの開発の進展というものが、今まで開発されずに、今、映画では中央の方が分かりやすいように沼と言っていましたけれども、いわゆる潟と呼ばれる遊水池が新田に代わっていく、そういうことから遊水池がなくなる、洪水がやってくる、その洪水が水害を引き起こしてくというふうに見ていただきたいと思います。

## 大河津分水 位置図



## 大河津分水 全景



## 近世越後における郡別石高



そして、さっきの絵をみてください。高い堤防です。この堤防が、かつて民間治水論者に言わせると、高い堤防を造れば造るほど水害が大きくなると、堤防甲冑論と言いまして、片一方、鉾側を強くすると甲冑が強くなる、甲冑が強くなるとまた鉾を強くするという堤防甲冑論です。実際にご覧ください、今の3倍近く高い堤防が造られて、これで洪水を防ぐという考え方をとったわけです。

ところが、その洪水は抑えることができませんで、破堤して浸水した水が一面に低い土地に溜まる、これも一見、平和そうな絵ですけれども、実はさにあらず、下にどろんこの病原菌がいっぱい、いわゆる「病地獄」と言われる越後平野独得の水害がそこに出現するわけです。

同じく、これを見てください。湛水した天井に入り口を造って、まさに自助、共助、公助という形で避難小屋を自分たちの力で造り、助けあったということです。

そして、これはそれを写真で写したものです。新潟市の今の郊外ですけれども、まさに裸で裸足の子どもたちの姿が写っています。今の開発途上国等でよく見られる光景ですが、こうした惨憺たる姿が横田切れ 21 日後の様子としても撮影されているわけです。

そして、これも水害の延長上にあるわけです。ただし、気を付けていただきたいのは、稲刈りですが、稲刈りは排水機を地主さんたちは止めますので、そうすると自然に水かさが増します。そういう状況での写真ですけれども、まさに湛水田ということが水害の延長上に越後の米づくりとして存在したわけです。

そして、ここには渦が姿を消していく経過と、それからそれに対応して分水、放水路、隧道などが造られていく、そういう姿がここに出ております。

### 「横田切れ」一絵巻一



西蒲原郡横田村大字小池ニ於堤防久遠所ヲ望ム

### 「横田切れ」一絵巻一



西蒲原郡中条村大字大沼新田 罹災者之現状

### 「横田切れ」一絵巻一



西蒲原郡信条村大字西ノ新田 福月寺市家屋破壊之惨状

### 「横田切れ」一写真一



横田切れ21日後のようす(現在の新潟市北場)

そして、今も洪水警報が出ますように洪水が繰り返し、かつての横田切れの洪水を上回る洪水も実は起きているわけです。にもかかわらず、先ほど阿達さんがお話のように大河津分水ができた後、そうした洪水が大きな水害をもたらさなくなったということ、ここで見ていただければと思います。

(阿 達) : 大河津分水ができてからも、ギリギリのせめぎ合いといいますか、溢れるところを守る、あるいは若干漏れているのだけれども、それでもしのぐという形がある、この話は新しく洗堰ができたり、新可動堰が今動き始めていますけれども、そのくんだりで若干触れますので、後に回したいと思います。

今ほど先生のご紹介があったとおり、新潟県の洪水の歴史というのは川が大きいだけ影響もかなり大きかったのだろうという気がしています。実際、燕のお話の中で和釘の生産、三条もそうでしょうけれども、それも困った生活維持のために始めたという話もあります。中之口川の下の方には月潟があったり、あるいは白根がありますが、凧合戦だったり角兵衛獅子等も洪水の歴史の中で生まれた一つの産業だったり、今で言うと、行事だったりするという話も聞いたりしています。先ほど分水のエネルギーの話をしたけれども、確かにあの水しぶきを上げた分水路のエネルギーが洪水という形で形を変えた時は、多分ものすごいのだろうと思います。実際のところ、先生がよく言われますけれども、洪水の氾濫する被害のほかに、いわゆるこもり水による被害の方がむしろ悲惨だったのだと、それこそ女性の方々にとっては大変なこともあったという話も聞いています。身売り話もあったように聞いていますけれども、その辺、氾濫するだけではなくて、水がなかなかそこから抜けきれなかったと、排水できなかった時の悲惨な状況もご紹介いただければありがたいのですが。

(五百川) : そこで、新潟日報の方で「流出の記録」でしたか、系譜という本を出した。あそこに出ています。いわゆる太平洋側の急流のように、一過性でさっと過ぎていくのと違っていて、今の写真でも21日後でああですから、とにかく「こもり水」ということで湛水するわけです。その結果、まず一番は収穫がゼロになるということです。1週間だいたい水に浸かりますと、もうだめです。1年間収入がゼロになるわけです。従って、今度は砂に埋もれた田んぼを立て直すことができない、従ってどうするか、外に行かなければならない。西蒲原でよく言われるのが「北海道落ち」という言葉で、そういう場合には北海道まで出なければいけない。だから、子どもたちは学校に

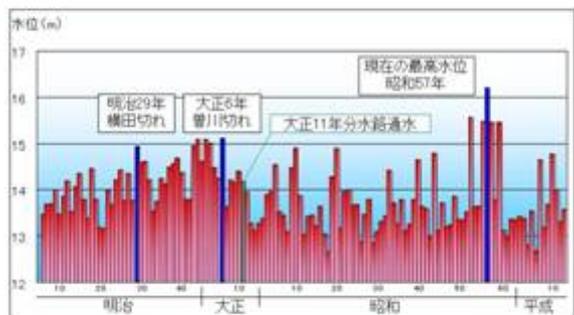
## 湿田に浸かっての農作業



## 越後平野の潟と放水路



## 大河津地点の年間最大水位の記録





けです。そういうことで、ここに実は「造物、いささか疑うべし」と、良寛さんの大事にする仏さんも神様も疑わなければならないと、何でこんな状況にしていくなのかと。「たれかよく四載に乗じて、この民をして依るあらしめん」、四載というのは中国の伝説上の治水によって皇帝になった禹という方が、行政上、見回りに行くときに乗った四つの乗り物、それが船であり、車であり、ソリであり、かんじきだったわけですが、そういうものに乗ってよく見回りをした。この水害がなくせないだろうかということで、村の人たちと盆踊りしたり花札をしたという、良寛さんの私が一番好きな絵がそこにあるのですけれども、そして次に皆さん、お手元の資料にもございますから、後で読んでください。こういうすばらしい水害を憂える詩を作っております。そこに一番終わりの数行目ですか、「この農民の深いなげきを収めてくれるのだろうか」、こういうふうに良寛さんというのは、決して山ごもりの仙人ではなくて、そうした良寛さんのお気持ちが、皆さんご承知のように、この良寛さんを全国区の人物にしたのは、言うまでもなく信濃川沿岸、国上、今の分水地域の人たちが真っ先に良寛さんの言動を記録し、そして近代に広く広めた。なぜ広めたか、良寛さんの気持ちの上に立って、大河津分水という発想が出てきたということなのです。

(阿 達)：良寛さんはその当時、あちこち、それこそ行脚される間に、この信濃川の洪水やら悲惨な農民たちの状況等を説明されたり、お話しされたりして回っていたのでしょうか。

(五百川)：この詩を見ると、そこに百姓、子どもと書いていますが、実に具体的に暮らしぶりを詠み込んでいるのです。だから、なかなか他にできない非常に鋭い目で見られていたと思います。

(阿 達)：それと、良寛さんが本当に憂いに憂いたこういった状況について、先人達は次々と若干時代を異にしますけれども、立ち上がります。先人達のご紹介、先ほど本間屋数右衛門さんの話がありましたけれども、どんな形でどういう時期に立ち上がったのか。

(五百川)：それで、この大河津分水史というのは、今新しい、例えば弥彦神社の宝物館に何十年も眠っていました資料が公開されて、実は今の大河津資料館というのはそういうことがあって、実はリニューアルしているわけです。だから、これまでの大河津分水史の見せ方とちょっと違っているのです。例えばそれが本間屋数右衛門と、本間数右衛門ではなくて本間屋としているのは、本間屋という船問屋さんの召使いということが文書の上では書かれているわけです。しかし、主人の後見をするのだから、研究された小村式先生は、番頭格くらいの人だろうとおっしゃるのですが、実際に今残っている照明寺のお墓を見ますと、本家の本間屋の堂々たる大きな墓と比べますと、まったく小さなお墓で、しかも離れた共同墓地にございます。お寺の方も、本間本家の人ではないとおっしゃるのです。だけど、本間屋に仕えていたので、新しい説では日本の庶民というのは多勢名字を持っていたのです。だから、本間数右衛門と名乗ってもいいのですけれども、公文書の上では確かに本間数右衛門とは書いていないのです。本間屋数右衛門と書いてあるのです。それで、2代で運動のために金を使ったということで絶家となっていて、明治に内務省、国が功労者として表彰する時に、本間という新しい家を興すわけです。皆さん、ご承知のように旧民法ではそういう形になっていましたから、そういういきさつがございまして、その数右衛門さんの発想した時というのは、実は2代目数右衛門の文書が残っているのですが、それを読みますと、これを堀割りしたら、この中州をくださいと、それから前面に円上寺湯、鎧方という湯の干拓をさせていただけませんかと書いてあるのです。つまり、その時代にはまだ大水害ということよりは、ご承知のように松ヶ崎というところで阿賀野川が堀割を造ったら洪水が流れ込んで、阿賀野川の河口が200、300メートルと広がったのです、その結果、ご承知のように福島潟境界が干上がって、ちょうど徳川吉宗の新田開発令が出まして、そういう大地主さんたちが投資して、市島とか佐藤とか田巻とか、そうした大きな地主さんが土地に資本を投資して、大きな田んぼを手に入ると、

いわゆる全国で有名な千町歩地主がなぜあの阿賀北の福島潟周辺に集中したかというのは、そういうことなのです。それが船問屋の情報ですから、すぐ港町・寺泊の耳に入って、よしということで堀割を行った。どっちかと言うと、開発というものが先に立った、そういうねらいなのです。したがって、幕府がそれを許可しないと、どこが実行したかと言うと、皆さんご承知の内野の新川の堀割になるのです。そして、三潟水抜きと言いまして、鎧潟、田潟、大潟という潟が埋められて、鎧潟はだいぶ残りましたが、大きな新田が下流に生まれるわけです。

ところが、幕末になりますと、例えば小泉蒼軒という、元の新津の市之瀬というところにおうちが残っていますけれども、その方に至ると、大河津を掘ったら土地をくださいということは一切書いていない。もう洪水被害、水害をなくすためにこの工事を何とかやってください、こういうふうになるわけです。したがって、江戸末期、明治初めからはもう大河津分水というのは大水害をなくすためにどうしてもやりなさいと、特に小泉蒼軒の場合は、お殿様の政治をやめてほしいという。というのは、ご承知のように信濃川流域というのは新発田藩、村上藩、長岡藩、天領、みんな入り交じって、てんでんばらばらで、堤防の形も細かったり、太かったり、低かったりして藩によって違うのです。そういうことでは、信濃川という大きな川をとでも治めることができないということから、小泉蒼軒の大河津分水論というのは、信濃川を一貫して考えた治水策に変わるわけです。以後、越後平野の治水論は、小泉蒼軒のとなえる方向に進むわけです。そして、お殿様の政治が倒されますと、明治の中央政府ができて、ようやく信濃川水系を一貫した治水工事が可能となるわけです。そして、明治3年、真っ先に着工されました。今の映画では中止とありましたが、これも新しい資料で、実は中止ではなくて、完成寸前で通水するだけの状況にできていたわけです。しかし、その幅はわずか数十メートル、従って洪水で松ヶ崎の二の舞で、信濃川の水がどっと日本海にあふれ出る。そうするとどうなるか、そのことが重要な問題なのです。

それで、当時の名県令と言われた楠本県令は、敢えて大河津分水の工事に携わった人々の反対、これだけできているのだから通水せよという要求を拒絶するわけです。そして、それは元通りに埋め立てられてしまうのです。廃業は明治8年、明治5年にできて、2年も慎重に討議して。この楠本さんという人は、後の東京府の知事や衆議院の議長にもなる立派な人でして、決して治水に無理解ではないのです。近くの三条の嵐南地域の堤防は、楠本さんが対岸の嵐北の町人たちを強く説教するのです。何であなた方は偉い方がいるということで、嵐南の堤防を許可しなかったのかと、実際に堤防がなかったのです。今回も水害は嵐南地域は大きくありましたけれども、嵐南地区に堤防を造らないあなた方のエゴは何だと、それで三条の嵐北の人たちは渋々承知します。そういうことで、初めてあの五十嵐川の左岸に嵐南の堤防が生まれたのです。だから、最初にその堤防の上には、その時に努力した松尾与十郎の銅像を建立して、今は嵐南のお宮に移されましたけれども、そういうことがあるのです。そういうことを是非、ご理解いただきたい。大河津分水史というのは一直線に進んだのではなくて、江戸時代、それから近代への出発というところで、そこに大きな転換があるのだと、こういうことも大事なことだと思います。

(阿 達) : 今ほど小泉蒼軒の話がありましたし、ビデオの中でも本間屋数右衛門が出ましたが、それ以外にも様々な方々が、それこそ親子2代にわたって、本間さんだけではなくて田沢さんという方もやられたみたいですし、鷲尾さんという方もおられるみたいですが、せっかく写真がありますので、ご覧いただきましょうか。では、小泉蒼軒から。



額の資本を出しても、人民結合一致しなければだめだと、この人の事業で今残っているのが西蒲原郡の中之口の堤防で、これを自分が設計して造ったのが、この鷲尾政直という人です。とにかくこの鷲尾さんという人が人民結合一致というのを大事にして、自助、共助、公助ということをみんな実践しているのです。だから、よく私は言うのですが、中央から来た方が掘るまいかという隧道堀を非常に高く評価された。これはその通り高く評価されているのですが、実はああいう隧道でも十いくつまだ他にあるでしょう、それから堤防づくりも各所にあります。道路も橋もそうでございます。まさに人民一致結合、金のないものは労力で、金のあるものはお金を出してという発想で取り組むわけです。こういうことが、治水の原点においたということは、非常に重要な思想、発想でないかと思えます。

そしてもう一人、皆さんご承知の田沢実入、大河津分水と言いますと、すぐ白根の古川の田沢実入という人を挙げますが、私がこの人の一番好きな言葉は、「水の害毒をたくましようするは人の之を治めざればなり、水の罪にはあらざるなり」と、今も立派に通用する言葉だと思えます。

そして、この人は大河津分水工事で亡くなった方たちの慰霊のために桜を植える、分水名誉町民の山宮さんと力を合わせまして、今も立派に堤に「いく千春かはらでにはほへ桜花植えにし人はよし散りぬとも」、こういうすばらしい桜の歌で、今も公園にこの碑は建っております。そういうことで、ご紹介しました。

(阿 達):これから新しく大河津分水の建設工事に入る話になりますけれども、先ほど映った田沢実入さん、それこそ私はお会いしたことがないのですが、今は亡くなられておりますけれども、そのお孫さんで、新大名譽教授当時にお会いした小柳孝巳さんという方がおられたのですけれども、とにかく誇りに思うと言うことを繰り返し取材で話しておられました。それから、その前に本間屋さんの話がありましたけれども、これもご子孫でいらっしゃる本間力さんという方にもお話をお伺いした時には、先祖はしなくても、誰かしらやっただろうと謙遜していながらも、やはり誇りを持っておられた。誇りに思っておられる中で、一生懸命造ってほしい、やらなければだめだという要請やら陳情やらを繰り返したわりには、結局、私財を投げ打ったり、田畑を売り払った中で最後は貧しい生活を送られたり、子孫の方々はそんなに優雅な暮らしをしているわけでもない。

## 田沢実入 (1852~1928)



### 【信濃川治水論】 (1881)

水の害毒をたくましようするは人の之を治めざるなり、水の罪にはあらざるなり

## 桜之碑



いく千春  
かはらでにはほへ桜花  
植えにし人はよし散りぬとも  
日本こころの佐々木忠  
現と雲にま露つよもか群  
大正十三年十月 七十三翁 田沢実入

## 大河津分水の桜並木



何が証拠として残っているかと言うと、これを見てくださいと言ったのが、なげしの上にかかげられてあった県からもらった賞状で、先ほど先生も田沢実入といいますか、業績を讃える話をされましたけれども、田沢実入も賞状1枚、君知事がご健在の頃の賞状が1枚あるきりだったので。その時に、こんなものかなと思いながらも、それでも彼らの2代、3代にわたる苦労が、ようやくこれから話に入る大河津分水の建設、完成という形に結びつくわけです。なかなか長い道のりでしたけれども、先ほどお話になった明治5年に一度はできたと思われる大河津分水、考えてみれば、当時の技術力とその後、37年くらいたってからまた正式に着工されるわけですが、技術力の違いがかなりあったと思うのですが、一説には、明治5年の完成をみない方がよかったと、そうすると、松ヶ崎の話になりますけれども、42年くらいまでの間に、日本の土木技術も進歩したのだらうと、それが今回の東洋一のプロジェクトと言われる大河津分水の建設を見る大きな原動力になったと、技術力なくして、今こんな形で皆さん過ごしてははられなかったという話をよく聞きますが、実際にいかがだったでしょうか。

(五百川) : その点、本当にそれが大事な問題で、今回、本の宣伝で申し訳ないですけども、大河津分水双書の中で、新潟大学の工学部の大熊孝先生が、土木技術史という立場で明治初年の分水工事のことについて書いてくださいました。そして、やはり近代的な土木技術と出会ったことで、こうした水の思想家の大河津分水構想が実現していくという点で、まさに技術というものの持つ大きな意義を感じざるを得ないのです。そういうことで、今、お話のとおり、土木技術者というものがそこに登場してくる、そのことが非常に重要で、それが大河津分水の完成という段階で大きな実を結ぶということになったと思います。

(阿 達) : 正式な大河津分水の着工は明治42年、その2年くらい前に建設の計画が立てられるわけで、15年かかり、着工してから13年くらいと言われてはいますが、長いですか、短いですか。

(五百川) : やはり長いですよ、長いと言わなければならぬと思います。

(阿 達) : 実際、数字上で言いますと、延べ1,000万人、残念ながら亡くなった方も100人ほどおられるという形で伝えられています。やはり難工事だったと、先ほど化け物丁場の話がされてはいたけれども、極めて難しい工事であったのでしょうか。

(五百川) : 言われております難しい工事が化け物丁場と言われている、化け物が住んでいるのだらうと恐れられた、今も跡がよく残っていますよね。10年ほど前にもまた地滑りを起こして、県の土木部が工事をしております。だから、当時の技術としてみて、特に地質学の面での研究が必ずしも進んでいなかったといえますか、そういうことで予測せざる大きな地滑りが起きて、その結果、工事が1年、2年とずっと遅れるわけです。その間に戦争がありました。発想の段階では日露戦争が起こって遅れているのですが、今度は第一次世界大戦が起きて、また遅れております。そして今言った大地滑りの発生でさらに遅れると、そういう形で工事が非常に何年もかかったということになったと思うのです。しかし、そこに注がれた越後の人間の勤労と言いますか、そういうものが今の延べ1,000万人と言われる中で、ただ量が多かったというのではなくて、実は工事責任者は、13年間責任者をやった渡辺六郎という人が、その働く姿に最も感動を受けたということをおっしゃっていますので、これは後でまた触れることになると思います。

(阿 達) : それこそ日本の技術の粋を結集した東洋一のプロジェクトはいったんできますが、残念ながら自在堰の陥没ということで壊れます。とかく最初に造られた土木技術者たちの名声と言いますか、お名前よりは、その後、自在堰を立て直す技術者たちの名前の方が後世に伝わっていますが、何を言わんとするかと言うと、技術力とか機械力だけではないもの、いわゆる土木技術者、それこそ先ほど所長がお話しされましたけれども、今、所長さんたち、土木技術屋さんたちにつながる

当時の技術者たちの熱意と努力、これが大河津分水を造る大きな支えといますか、機械だけでは、あるいは技術だけではできなかった背景があると先生もよく言われていますけれども、その辺はどうでしょう。

(五百川) : それは事実だと思います。やはり例えば現地で指導する土木技術者というのは、土木作業員の方と全く同じ服装をします。そして、寝起きをともにして打ち込むということ、そして、実に真剣に、その姿が大きな印象を与えることになるのではないのでしょうか。

そこで、実は技術者の登場ということでよく話題にされるのが、本当は自在堰を設計した失敗の岡部三郎という、確かに今おっしゃられるとおり、この人の名前はみんなに語られないなど、しかし考えてみますと、我が国で最初にして最後の独得なベアトラップという自在堰を造った人です。しかも、直接現物を見ていないで設計して、アメリカで行われていたそれを取り入れるわけですから、今、実はなぜベアトラップという独得な自在堰を造ったかということ、やがて次の双書の第6巻に書いてくださる人がいますから、その岡部三郎と無二の親友の宮本武之輔がそこに登場する。それから今おっしゃる土木技術者のまさに魂といますか、土木技術者が目指さなければならない理念を説いたのが、宮本の責任者である青山士、今の北陸地方整備局の局長に当たるわけですが、この青山士なのです。そして、二人ともそういう意味で、今日の技術者のある意味で原点と呼ばれる人だということで、先ほどの映画の中に取り上げられて、今回の愛知万博でも上映され、おかげさまで大河津分水が全国区の映像として受け止めていただけるようになったと思います。

この青山士という人はこういう人なのですが、なかなかジェントルマンという形で、日本人ただ一人のパナマ運河の建設に参加した設計者という一つの品格が表れています。この青山士さんの士というのは、明治11年の意味の士なのです。サムライの士だけでつけたのではないのです。明治11年生まれで、ご本人も私は自分の生年月日を絶対忘れなかったとおっしゃるのです。実は今、私どもの分水町あたりで、少なくとも数人ご生存されていると思いますが、士という名前の方がいるのです。その工事の責任者である青山さんの名前にあやかって、男のお子さんに名前をつけたのです。だから、非常にその考えというのが皆さんに広く伝わったのではないのでしょうか。

それで、有名な言葉が、この竣工記念碑に刻まれている「萬象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ」、「人類ノ為メ国ノ為メ」と、要するに技術というものは人類、この方がすぐおっしゃることが、公共事業は多勢の福祉に捧げる事業だと、福祉と公共を一緒に必ずおっしゃる方なのです。それから、「萬象ニ天意」というのは、天意こそは良寛さんお得意の言葉なのです。良寛さんは、天意のまにまに生きるということが人間としての理想ということをいわれるのですが、青山さんは多分、



### 青山士



7年間の越後の生活で、良寛さんと接しておられたと思います。この間ちょっと追悼集を見たら、送別会での歌で、おけさの一節に良寛さんが春日に子どもたちとまりつきをするという文句がありますが、それを歌われたといっていますから、おそらく青山士は良寛とも接点があったのだと思います。カトリックやプロテスタントのクリスチャンではないのです。無教会派のキリスト教ということで、その言葉をキリスト教に求めるという考え方が、私は以前、そう教わって書いていたのですけれども、どうも違くと、これはキリスト教の言葉ではなくて、青山自身が子どもの頃から習っていた漢学、おじいちゃんの青山宙平という人の影響を強く受けたと言われますが、その漢学の思想です。そういう天というものを非常に考えられた人で、この言葉は越後の持っている風土、思想から着想された言葉だと、私はそう考えているのです。

ただ、それにプラスしてエスペラント語のように、世界共通語でこの言葉を「人類ノ為メ、国ノ為メ」ということで裏面に書き記したのではないかと思います。そういう青山士の言葉も、やはり越後の水の思想の一つとしてご理解いただけるのではないかと思います。

(阿 達)：今ほどお話のあったエスペラント語について大熊孝先生がもの本に、当時、かなりエスペラント語に対する弾圧が強まっていた頃で、敢えて使ったというあたりが土木技術者が自然に対するのと同じように、社会の時流に対して不屈の精神を有していたという証拠ではないかという話をされています。その大熊先生が人類愛に満ちた高邁な思想、技術者としての自然への洞察力の深さを感じるというお話でしたけれども、それこそ最近、国内だけではなくて国外の方からも、この石碑だけではないでしょうが、先人達の労苦をしのびながら、あるいは技術的なものを学びながら留学生がたくさん訪れているそうですね。

(五百川)：本当にうれしいのですね、留学生の方も勉強においでになって、先ほどのような映画を見ていただきますと、本当に率直に感動の言葉を記してくれます。また、私が嬉しかったのは、キムさんという突然来られた韓国の方がおりまして、そして、何で来たかと話していたら、実は私、韓国土木学会の会長をやっていたキムですと、私の一番尊敬する技術者は日本人の青山士という人ですということで、わざわざ東京に出られるのに新潟空港で降りて、足を大河津に向けてくださったのです。そして、半日、大河津の堤防を歩いて、青山士の記念碑を見てくださって、まさに人類国境を越えて、土木技術者の高邁な思いを感じてくださる方がいて、私は本当に嬉しく思いました。

(阿 達)：先ほどお話した自在堰陥没前の設計に携わった岡部三郎、これに対する雪辱戦が宮本と青山のコンビだったと、先輩のために汚名を晴らすべく頑張らなければならないというのも支えにあったみたいですが、この二人の出会いなくして、こういった偉業はなされなかったという形で

#### 青山士－信濃川補修工事竣工記念碑－



#### 青山士－信濃川補修工事竣工記念碑－



しょうか。

(五百川)：これは、やはり偶然であり、また必然であったと思います。とにかくあの自在堰陥没というのは、当時の工事で最も重大な問題だったのではないですか。それほど財政力のない時代に、とにかく多額な投資をした、それがゼロに近くなるわけですから、これは当時の内務省の土木関係者にとっては、大変な事件だったと思います。そこで、とにかく今でいう本省の課長級の人が、ある意味で非常に低い形の現場の主任として下ろされて来るわけですから、そして、そこで幸いだったのは、青山士という最高の指導者がそこに置かれたと、越後平野というのは恵まれたと思います。最初の第2次の工事もそうだったのです。古市公威という万代橋初代の設計者ですが、初代の土木学会の会長です。沖野忠雄、これは二代目の方で、当時、日本を代表する技術者がいずれも越後の地を訪れたということが偶然にせよ、とにかく非常に大きな輝かしい、それこそ新潟日報事業者が公共工事のキャンペーンで、元旦に大河津分水の写真を載せて、公共工事の原点をそこにおいて考えませんかという、そういう連載を投げかけてくださった。それが、ただ単に技術史の上でということではなくて、青山、宮本という人間像の上で、人間というのは大事なのだと、こういうことだと思います。そういうことを我々歴史を通して考えていく必要があるのではないのでしょうか。そういうことを水の思想、こういう仕事が生まれたという風土を私は越後平野、蒲原の中から考えていかなければならないと思っています。

(阿 達)：この自在堰の陥没というのは、不運にもと言いますか、幸いにもと言いましょうか、つまるところ、かなり渇水が続くわけです。水がどんどん大河津分水から流れていくと、一方で舟運も全然使い物にならない、この3年半というのは、ある意味では後々大きく影響する、本当に大きな分岐点だったような気がするのですけれども、それについて、いわば信濃川の大事さと同時に大河津分水の大事さというのにも認識するわけです。その大きなきっかけになっていますか。

(五百川)：そうですね。やはり大河津分水というのが近代化の結実と開花と、実を結び、そして花を開かせたと思うのです。だから、そういう意味で県民の思いも、大河津分水にかつては注がれていたのではないのでしょうか。やはり連年の花見客もたくさんおいでになりまして、そして大河津分水というものが非常に高い県民の関心を集めた時代があったのです。ところが、それが戦時中ではたと止まったのです。そして、戦後の昭和20年代に分水地域の人たちが大河津分水をみんな忘れてしまったというので、慰霊祭と併せて、ちょうどいいことに国定公園にしてもらったのです。それをきっかけにして大花火大会や感謝祭をやっているということが、今回、私は分水町史をやっていて発見したことなのです。当時の岡田県知事さんが式場に来て、そして参列しているのです。県の土木部長さんも来ておられまして、そして、盛大な大河津分水への感謝祭というのを戦争直後の20年代にやっているのです。今、それがどういう形で途中中止になったのか分かりません。その後、町村合併等で町や村が変わりましたし、県知事さんも交代しまして、いずれにしてもそれが今は4月に慰霊祭という形で、これも皆さんにこの機会に言うておきますが、私は本当にうれしいのです。今それこそ何十年たっても、毎年亡くなられた100人の慰霊祭に整備局長、必ず本人が来ます。新潟市長も必ず本人が来ます。そして農家の代表(各土地改良区)が全部揃って来るのです。そして、その慰霊祭をやる。まだまだ県民のそういう意識の中に大河津分水への思いが残っているのかなと、そういう思いがあります。

(阿 達)：知らず知らずのうちに大河津分水の恩恵を忘れ去ったり、恵みというものを普段感じなくなっているような感じがします。大河津分水ができたことによって特に下流部分ですけれども、あるいは河口部分、変わったような点がいくつかございますけれども、あるいは恩恵について、改めてここで先生の方からご紹介していただければ。

(五百川) : これは、ここでは是非ご紹介したいのは、本年度の慰霊祭ですが、沿線町村民を代表して篠田新潟市長が見えました。私はポケットから紙を出して読み上げられるかなと思ったら引っ込めまして、こういう話をしました。政令指定都市、日本海側最大の都市・新潟市は大河津分水があって、初めて実現したと、非常に的確な歴史認識、ともすると、今の学校もそうですが、市町村という行政の枠だけで考えるのです。今、新潟市の学校の方たちは、カリキュラムの関係があるのでしょうか、ほとんど来なくなりました。私が学校に勤めていました頃というのは、ほとんどの学校が春遠足、秋遠足で大河津分水を訪ねてきてくれていました。ところが、それが今は途絶えました。しかし、今の篠田市長の言葉のとおり、まさに大河津分水というものが今日の新潟市のエネルギーの、この図をご覧くださいとお分かりのように、ここに例えば万代島という大きな島が、これは貴重な明治20年代の地形図なのです。島になっています。今、朱鷺メッセというのでつながっています。万代橋が1,000メートルを超える長い橋で、当然木の橋です。今の県庁は川底になっているところに建っているわけです。こういう西の新潟という世界しかなかった、要するに西にしか新潟という言い方はなかったのです。それが東新潟という言い方が生まれてくるのは、大河津分水以後になるわけですし、次にいきますと、こういう形で現在の信濃川と24年当時の信濃川を見ますと、そこに大きな発展の姿が見られます。まさに東西新潟が一つになって、戦後、実は沼垂中学校ということで、東新潟地区の人が作ろうとしたのです。ところがだめで、東新潟中学校というふうにな名前が変わるのです。戦後は東西新潟が一つになる形で進みます。そして、亀田郷がご承知のように新しい市街地として新潟の発展を引き受ける、そういう素地がその後の土地改良事業によって生まれるということも、こういう地図からうかがい知れると思います。



### 川幅の縮小化



(阿 達) : そこでは、関屋分水が入っていますでしょうか。

(五百川) : ここにはちょっと赤い線で入れてあります。

(阿 達) : 今、西新潟という話が、それこそ東西に分かれるような格好になり、最終的には新潟島と言われています。関屋分水が昭和47年にできるのでしょうか、大河津分水を補完するような形で新潟市や河口付近を守っているということになるわけです。先ほど話しましたけれども、いわゆる大河津が完成したり、関屋分水が完成したりして、本川そのものが溢れたりすることはなくなったということですね。一昨年の7.13水害では、五十嵐川やら刈谷田川の若干支流等においてそういったことも見受けられましたけれども、本川の大きな被害を守ってくれているのが、ある面では大河津分水、それから補完する関屋分水かと思っていますが、それでもやっぱり何回か大河津分水が危機に見舞われていると、堤防のすぐ下まで水が来ているという状況もあるやに聞きますが、そのたびにひやひやされているのでしょうかね。

(五百川)：前の会で信濃川の名前のことでご質問があったようですが、私はそのことと長野の水との関係ということで、この間の大洪水は長野の大雨がやってきまして、分水路の堤防すれすれで、実は新潟の洪水というのは、長野発が大きいのです。信州水、信濃水と呼んでいるのです。木曾川と同じなのです。だから、越後の国に通っている川ですけれども、それが信濃川と呼ばれる必然性というのはそこにあるのです。川というのは、元々は統一した名前がついていないので、新潟の人はいつまでも大川と言っていましたし、鳥屋野の人は鳥屋野川などと呼んだり、あるいは十日町、川口あたりまでは千曲川というふうには呼ばれたりしてきていますが、いずれにしても、そこに信濃川と信濃がついたというのは、木曾川と同じで、木曾川も木曾で降った大水がやってくるのです。そして、新潟県も信濃で降った水がやってくるのです。そうなりますと、そういう洪水のことも含めて特に分水地域の人は何だと、今の分水路で大丈夫かと、うちの資料館で講座をやると、そういう質問が必ず出るのです。それで、現状は洗堰の工事が終わって、可動堰の工事が始まるうとして、しかし、地域の方々はもっと大河津分水路を本当に考えてほしいという声が出てきます。そういう状況です。

(阿 達)：先ほど刈谷田と五十嵐川の話をしました、私の住んでいる小須戸の上下流の方、右岸も左岸も今堤防の拡張工事なり、嵩上げの工事をやっています。これは大河津分水から下流の方の話なのですが、肝心の大河津分水は今お話になったとおり、2012年の完成を目処に新可動堰の建設工事が始まっています。より強固なものを造って、より安全に越後平野あるいは新潟県の県民の方々を守ろうということだと思っておりますけれども、新しい何か方法も導入されているという話を聞いています。ラジアルゲートの方式による可動堰は全国で初めてらしいですけれども、それは先生、今までの方式と違うような話ですか。

(五百川)：本当は、今日はむしろ事務所の方々から説明をいただければいいのかもしれませんが、皆さんお手元に大河津可動堰改築事業というしおりが配られていると思います。そこをご覧くださいと丁寧な説明がついております。だから、それをご覧くださいになると、まず新しい可動堰が水路の中央部分に移されております。今までの可動堰というのは右岸よりにくっついて、今度は違うのです。そういう設計上の配慮があり、しかも今お話のように、新しい一つの方式としてこの試みがなされているということで、これは映像を出していただきますと、31番ですか、ここに位置が明示されておりまして、今までの右岸よりでありまして、それがちょうど真ん中に位置するのです。何しろ横田切れのエネルギーというのは、その後研究された方のお話ですと、原子爆弾1発分だそうですから、すごいエネルギーで洪水がぶつかってくる。そういうエネルギーをど真ん中で立って受けるという形になっています。

### 新可動堰建設場所



### 新可動堰イメージパース



そして、次にありますように、こういう新可動堰のイメージパースというのがここに出ています。こういう方式の技術的なメリットというのは、とにかく今、阿達さんがおっしゃるとおり、新しい一つの技術として試みられるということで、私どもは全面的な信を置くわけです。宮本武之輔が「信をなす大事のもと」と、これが宮本武之輔の残した最も有名な言葉です。

それで、実はここで説明はしませんが、皆さん是非、4月の終わり頃から企画展、大河津資料館で新可動堰を含めた企画展をやります。そこで非常に詳細なパネルが展示され、また、ご講演も既に友の会の皆さんにはやったのですけれども、ご講演をいただく計画もごございますので、是非、こうした新しい可動堰、非常に魅力的な、私はこれは大観光基地のメインになるのではないかなと思っているのですが、完成を非常に楽しみにしております。いよいよこの5月から本格的な工事も始まっていくのだらうと思っています。そのちょっと下流の遺跡の発掘も同時に行われるそうでございますので、この二つの楽しみがあるということでお知らせしておきます。

(阿 達) : 今ほど新しい可動堰の紹介やら、先生のこれからの講座等の話がありました。実際、今、大河津分水、洗堰の上流の右岸が破堤したらどうなるか、150年に1回の確率で大雨を想定したデータなのですが、中之口川と西川に囲まれたほぼ一帯、これが1メートルから3メートル以上の浸水になると、あまり細かい数字を言ってもはじまらないのですが、被災戸数が53,000戸になるだろうと、被害総額は3兆4,000億円、これは横田切れ等の話、時代はかなり違いますので比較にならないかもしれませんが、当時は流出家屋は500戸とも2,500戸も言われていますけれども、死傷者は50人とか75人とありますが、そんな比ではなかろうと、今これだけ近代社会の中で、実際同じような規模で破堤といいますか、氾濫した場合、シミュレーションも多分想定外という形だろうと思うのですが、そうならないようにどうしたらいいかと、一生懸命ハードの面の新可動堰の工事が進められていくということの一方で、大事なハードはハードでいいのでしょうけれども、ソフト面かなと、それこそ住んでいらっしゃる、あるいは地域の沿川住民の方々の意識の中でそういった川に対する視点がなくなった場合、一番こわいかなと思っています。これはこれまでの様々な講演会等で先生ご自身が述べられているのですけれども、いわゆる災害防止のためには、災害の歴史に目を向けることが大事だと。

また、川を学ぶということ、これは教科書に書かれていないその土地の歴史、それから人々の歴史、これが川を学ぶことによって見えてくるというご指摘もされています。実際、昔のこと、あるいは被害のこと、洪水のことを忘れがちな現代ではありますが、先生が具体的に述べていらっしゃる中之島のカズラ、これは濃尾平野では輪中のことなのでしょうけれども、それすら地元の方は忘れていくということも前に述べていらっしゃると思いますが、この点については。

(五百川) : それこそ鷲尾政直のところでちょっと述べましたように、その土地に住んでいる者が何よりも自然の災害を意識すると、そして、自らが人民一致結合といいますか、そういうことで対応すると、これは非常に今も通用する主張だと思います。私は、そういう意味で地域の歴史を掘り起こしていきますと、例えば西蒲原ですと、曾根というところに、高橋源助という人が村の用水のために、結局は殺されるのですけれども、彼の首が役人が隠した蓋を加えて飛び出してきたという話です。それから、中之島の方ではご承知の与茂七伝説というのがありまして、これも結局殺されるわけです。しかし、二人についての共通点は、義民と呼ばれるのです。治水に尽くして村を救った義民なのです。桜宗五郎と同じなのです。義民伝説というのは治水に絡む人たちなのです。義というものを越後の人間というのは大事にしてきたのではないのでしょうか。ものや形で治水施設を見ることも大事ですけれども、そこから見えない人々の心、良寛さんの情、特に越後の人間というのは、歴史上の偉人としてはすぐ良寛を挙げまして、あるいは上杉謙信を挙げるのです。謙信の

重要な部下だった直江兼続が蒲原の治水にかかわる、そういう伝承が残されているのですけれども、実は上杉謙信が使った言葉というのは、第一義という「義」というもの、彼はそれを非常に大事にするのです。だから、「戦するなら謙信公のように」と、「敵も情けに泣くような」という伝承が残っているわけです。だから、春日山音頭という歌を見ますと、まっぴじめに「春日山頭松吹く風に今も変わらぬ義の叫び」といいますが、この義というのは謙信の信仰する仏教の一番奥義を指しているのです。

そういう意味で、越後の人たちの信仰といたしますか、そうした一つの思いといたしますか、そういうものが町や村にあって、非常に大変な水害も乗り切ってきたし、そしてまた皆さんが心を合わせて、今回の中越地震でも7.13水害でも、そういう見事な地域の人々の連帯と対応、そういう意味で私は最後に是非見ていただきたいのが、渡辺六郎という、先ほどちょっと紹介した13年間、工事の責任者として、そして責任を果たして、幸か不幸かといえますか、この方は亡くなってから例の陥没が起こるのですが、この方が工事竣工式に際して述べている言葉が、私は非常に好きなのです。とにかく自分の最も感謝している点は、延べ1,000万人と言われる人たちのよく働いてくれた姿だと言うのです。もちろん機械力もありますけれども、そういうことで、私は非常にうれしかったのは、ここが大川津という分水路の一番出口のところ、村を挙げて移転し、そして働きにも出た、それが大川津の方たちなのですが、その方たちが鎮守の森で鎮守の社を移すときに、その社額をこういうふうに従三位、渡辺六郎と書いてあったのです。どこかで見た名前だと思ったら、13年間の分水工事の最高責任者だった渡辺六郎、その人なのです。これは私ほうれいと思いました。とにかく工事で、我々とかく働かされた、移された、された、されたという形にとりやすいのですけれども、大川津の人たちは鎮守の森を移して建てる時に、その工事の最高責任者に自らの社額を書いてくれと頼んだ。

これは私は非常にうれしいと思います。このことは、今盛んに中央の方はPPPという言葉を使っていますが、最初のPというのは公共という意味のPなのですが、次のPがプライベートのPで、最後のPはパートナーシップということらしいのですが、我々の知っている言葉で言うと、簡単に言えば官民協働、つまり工事を進める側も、それに協力する側も協働すると、今そういう姿が叫ばれています。特に戦後の成田空港の闘争のように、まさに大公共事業をめぐるすさまじいやり取りがあった、そういうことが戦後の公共事業の中で言われるのですけれども、私はこ

## 渡辺六郎のこぼ

### 一大正13年(1924)3月、工事竣工式に際して一

「分水工事について自分の最も感謝している点は、工事の人々が極めて柔順でよく働いてくれたことである。・・・一度もけんか口論とか、殺傷事件がなかった。ことに冬季の厳寒を日に雨や雪の日も休まないうで従事してくれたことは、工事の進行上多大の便宜となった。・・・」

## 鞍掛神社近景



## 鞍掛神社





の大河津分水工事にあたって、本当に地域挙げて大きな大河津分水という公共の福祉のための仕事を感じ取って、この人たちを含めて三つの町や村が一緒になる時に、戦後、名前をどうするかということで分水町と、分水というものを誇りとする町の名前につけたわけです。そういう意味で、地域のそういう人々の持った公共の志というものを私たち

は素直に受け止めていきたいと思いました。今ある意味で、公共事業というものが本来の意味と異なった意味で使われていることが残念です。とにかく多勢の公共の福祉のためにこそ私たちの治水の工事があるので、それが大きく意識されていくことが、さっきおっしゃったソフトという面で、これがないとだめなのかなと、そういう意味で水の思想ということを改めて私たち勉強し直していきたいと、こんな考えを持っています。

(阿 達) : 今ほど公共事業の話をされましたけれども、公共事業の実施にしても、地元の方々が地元の近くを通る川に対する関心なくしては、多分どこが危険か、どこが危ないかという話が分からないとは言いませんけれども、一番よく知っていらっしゃるのは地元の方だろうと、そういう意味では、地元の方がそういった危険度を察知した中で、この川についてこうでなかるうかというような話をしてこそ、災害が起こるきっかけをまず事前に封じることができるだろうし、公共事業の実施に向けて大きな一歩を踏み出すことができるのではなかるうかと思っています。我々マスコミというのは、災害発生については大きく報道しがちです。どちらかと言うと、ぎりぎり防いだとか、しのいだという話が手薄というか、あまり関心を持たない傾向にあるのですけれども、我々自身の反省を含めて、これから自ら水の国と言われる新潟に住んでいて、もう少し川に対する関心、今回のテーマから言うと、信濃川なのですけれども、これは渇水も含めてですが、川の水の量、それから洪水的なものに向けてもう少し関心を持った方がいいのではなかるうかと、そういった認識を持っていくという形で私自身は思っています。

今ほど分水の話が先生がされましたけれども、3市町が合併された時の名前がこの20日で新しい燕市という格好で、分水という町の名前はなくなります。先生、横田もそうですけれども、大河津分水もそうです。分水町の今立地しているものが、新しい燕市という立地の中でくくられますけれども、そういった面ではもう少し広域的な、多面的な面でこういったものを取り上げるというか、関心を持つ必要があるような気がしますが、いかがでしょうか。

(五百川) : 私は地名については、これは私だけの考えであれば残念ですけれども、自治体の名称が変わるということは、地名をなくすことにはならないと思っているのです。だから、今、分水公園は早くから分水公園と、おいらん道中は分水おいらん道中、燕市分水おいらん道中、良寛資料館は燕市分水良寛資料館と名付けてきております。気になるのは、旧新津という言い方が気象予報等が出るのですが、私は本当はけしからんことだと思っているのです。新津という名前を誰が消したのだと、旧新津市という言い方があれば、これは一つ筋が通っていますけれども、新津という地名は我々何百年前から使ってきた地名でして、そういうものがたまたま一自治体の名前が消えたからといって、旧新津などと呼ばれるいわれはないと思います。そういう意味で地名というのは、お互いがその土地を愛し、そして関心を持ち続ける限り決してなくなることはない、特に私は今の水の思想で思いますのは、水の思想というのは何も言葉だけで書き表されているわけではないのです。

例えば今日も1階に写真が展示されていますが、燕に捧さんという本当に偉い写真家がおられます。その捧さんの写真に表れているのは、まさに水の思想なのです。ほほえましい船に乗った子どもたちの写真があります。あるいは、吉田の横山さんという有名な画家がカップのおもしろい絵を描いておられます。この間、吉田千秋という方が新津の大鹿のご出身で、今、吉田文庫とありますが、その吉田千秋が作曲した「ひつじ草」という曲があるのです。この間、新潟の音楽家の鍋谷さんという人が、吉田千秋も宗教的な雰囲気を持った方でして、りゅーとぴあのパイプオルガンでそれを演奏してくださって、まさに音楽でやさしい、すばらしい、これは実は流行歌といえますか、琵琶湖就航の歌の原曲になったのですけれども、それと違う原曲の持つすばらしい曲なのです。だから、写真にもあり、絵にもあり、音楽にもある。

そして、この地域は何よりも燕の「つ」というのは、「ツバメノジョウ」と書かれた時は津波目と書いてあるのでして、元々川の港なのです。燕市史にもそれが書いてありますが、津の世界、粟生津、米納津、大河津、「津」でつながれた世界、水の世界なのです。そこに燕の人たち、職人さんたちが和釘、と言ってもこれは当然、農耕兼業です。そういう職人さんたちの町、月潟の人は角兵衛獅子という芸能で一つの村おこしをやります。そして、分水の人は特に地藏堂という商いの町として、当時は数少ない地藏堂に米の取引所、今でも米所小路と名前が残っていますが、そういう町を作りあげるわけです。そういう意味で、一つに結ばれた津の世界の中で、燕市にはすばらしい産業資料館があるのです。

吉田町には、なぜか大河津分水の運動の中心になった人たちを育てた長善館というすばらしい私塾があるのです。西蒲にはいくつか私立校がありまして、明訓のように新潟に移ったのもありますが、今お聞きしますと、吉田町の方々が長善館をかつてのように復元するという構想をお持ちだそうです。そして、この分水町にはそうした水の思想の根本にある大事な愛と義の教えを説いた良寛さんの資料館があるのです。

だから、水の文化という点では、大燕市というのは私は非常に楽しい、敢えていえば観光という言葉でいいと思います。多勢の人々がそこにやってきて味わっていい世界があると思います。ただ、それを我々自身がまず掘り起こしてやるべきではないかと、そこに何か新しい燕市の展望に私は夢を持つわけです。たまたま今日、なぜか燕市の文化ホールで信濃川自由大学をもつていただいて、その点、不思議とご縁を感じるものがあります。

(阿 達) : 話も尽きないようですけれども、先ほど先生もお話になっていましたけれども、いわゆる大河津分水資料館を訪れる子どもさんたち、遠足あるいは修学旅行の関係が以前に比べて少なくなってきたようだ、教育長が今日来ていらっしゃるけれども、今ほどの先生のお話も含めて水の文化のある面では、新しい分水を含めた燕市が拠点になっていくのかなという気がします。次世代の子どもたちにこういった先人達の苦悩ぶり、あるいは大きな治水を守る大河津分水の意味合い、意義、そういったものをこれから検証し、あるいは継承していく意味で、それこそある国会議員が死の直前に、何とか大河津分水を大国立公園的なものにできないかと、誰しも遊びに来て、そこで学んで帰っていただいて、新潟県の大きな歴史を後世に残していくという役割を果たしてもらえたらと言っていたことを思い出しました。せっかくの合併のチャンスでございます。この大河津分水を抱えたという形の中で決して重荷ではなくて、今おっしゃった中で観光という言葉がありましたけれども、観光でも、あるいは他の言葉でもいいと思うのですけれども、それを持ち続けていく大きなきっかけになってもらえれば、大河津分水、先人青山あるいは宮本たちの夢もこれからも脈々と受け継がれていくのではないかと考えていますので、せっかくの機会です。合併を機にそういったことを考えていただければ、ありがたいと思っています。

時間もきました。それこそ先生、まだお話がいっぱいあるかと思いますが、取りあえず今日、第6回自由大学の「越後平野の水の思想」のテーマをここでいったん打ち切らせていただきます。せっかくのチャンスでございます。質問があれば受け付けたいと思います。

(司 会) : ご質問はございますでしょうか。

(会 場) : 寺泊からまいりましたけれども、本間屋数右衛門というお話がございましてびっくりしたのですが、番頭格に上げたのだけれども、実際はもっと下の役の召使い、召使いという言葉が使われたかどうか、そういうことをおっしゃられたので、非常にびっくりしました。番頭だと思っていたのですけれども、そういうと、姓は本来なかったのでしょうか、本間屋の何とかで、やっぱり本間という姓だったのかなというような感じがしますが、その辺が質問なのですが、ということになると、ご主人の本間屋様はすばらしい方なのだなと、結局、ご自分の財産、お金だけだったとも思えませんので、すばらしいと思ったのですけれども、姓があったのかどうかということが1点。

それから、こういった機会でないといけないので、直江兼続さんという方が、さっきの先生のお話の中では西蒲で土木工事をやられたとおっしゃっていましたが、その辺、時間がないからあまり面倒な話はいいと思うのですが、どういう資料を見れば書いてあるぐらいのお話を是非、お願いしたいと。

あと、日報さんにせっかくの機会ですから、今、先生は地名についてだいぶこだわって、私も同感のところがいっぱいあるのですが、日報さんは最近、例えば投書欄でも新潟市、長岡市というふうに書きます。私のところも寺泊ですが、長岡市という標記をされますけれども、今の先生のお話と併せて新潟市何々とか長岡市、例えば私のところは寺泊とかいうふうに、それぐらいまでお書きいただくといいのではないかと常々思っているのですが、これは要望ですが、今日、それを言うはめになったのは、燕市というスワローと、何で燕なのだろうと思ったら、先生のお話の中に津波目というお話もありましたので言う気になったのですが、学芸部長さん、ちょうど担当のところのようではいらっしゃいますので、ご一考いただければと、これは要望です。

(五百川) : 最初のことで、簡単に申し上げます。本間屋数右衛門というのは、今現にある文書といっても、そうないので、そこに書かれているのです。はじめ「寺泊町史研究」に寺泊町史の監修者の小村式先生が取り上げられて、正式には本間数右衛門と言わないで、本間屋数右衛門というべきだというのは史料の上からです。私が言うのは、名字というのは公文書上で書けないという制約はあっても、今の名字史の研究で見ると、大勢の人が名字を名乗っているのです。だから、本間数右衛門と書かれていても、間違いとはいえないのではないかと。それから、召し使いですけれども、一方、文書の上で主人が幼いということで、本間屋の当主の後見人になっているわけです。そうすると、その人は少なくとも番頭格ではないかと。だから小村先生は非常に史料に忠実な方ですから番頭とは書かれないのです。それから、数右衛門の名誉のために申し上げておきますが、小村先生の推理では主家の財産を潰したので追放になったというのは、とてもそうは思われないと、そして、それは村上藩が多額の借金を本間屋からしているのですが、それがとにかく返さないのです。それが潰れた原因で、むしろ数右衛門は主家の財産を何とか殖やそうとして努力した人だと、これを数右衛門の名誉のために申し上げておくと、これが小村先生のお話ですので、その点、誤解のないようお願いしたいと思います。

(※当日は、直江兼続についてお答えをおとしましたが、直江兼続の治水事業は伝承として語られていますが、それを裏付ける史料が全く乏しいということです。今後の検討課題です。)

(阿 達) : 様々な合併が進んでいます。多分に新潟市にしても長岡市にしても、旧町村名においては ( )

の中で、取りあえず慣れるまでという形があるのですが、これは10年も20年もすれば取れても分かっていくと思うのですけれども、( )付で長岡市(旧寺泊町)という話で今のところつけています。ただ、いずれかなくなるはずですが。寺泊町の下の大宇名を長岡市何とかという形で残していく、これについては私ども普通の見解だと思いますので、多分残っていくと思っています。ただ、本当に消える地名もあると思います。大事な地名も中にはあると思いますけれども、新しい地名に慣れていけば、それこそ昔から伝わっているような地名に慣れ親しんでいくのではないかという気がしています。私どもの立場としては、そこまでしか言えませんが、以上です。他にあれば、せっかくのチャンスなので、遠くからいらしている方もおられるようなので、他にあれば受け付けますが。

(会場)：先ほどのツバメの「メ」はどういう字ですか。

(五百川)：目です。津波目のジョウという古い文書の上では、漢字としてはそう書かれています。それで、燕市史をお書きになった中世史の田村先生が、燕市史のはじめに津の世界ということを使って、燕の産業も文化もみんな共通して世界から出てきたのだということをお書きになっていて、今度、分水町史が出ますので、田村先生は吉田町史はかかわりがなかったのですが、分水町史でどのようにお書きになっているかということを楽しみに、やがて本が出来上がって届くようですので、その後の燕市史の中世史の説明が、分水町史でどのように進んでお書きになっているか非常に楽しみにしています。

(阿達)：他にありませんか。内容でしたら、司会の方にバトンを渡します。

(司会)：五百川先生、阿達編集委員、ありがとうございました。どうぞ皆様、お二人に盛大な拍手をお送りくださいませ。ありがとうございました。

以上をもちまして、「我ら信濃川を愛する～信濃川自由大学」第6回講座を終了いたします。本日は長時間にわたりご参加いただきまして、誠にありがとうございました。